児童朝会　講話　　　■令和３年１０月１８日
№１５　「ペットロスからの」

おはようございます。

校長先生の声届いていますか？

まず、昨年度交通安全の学習をがんばったということで、警察署より表彰状をいただいたことを報告いたします。

それから先週金曜日の公開授業、みなさんとてもよくがんばりました。大勢のお客様がこられましたが、どの先生も「敷津のこどもたちは本当によく頑張っていますね」とお褒めの言葉をいただきました。特に５年生のみなさん、５時間目の授業まで、よくがんばりました。先生に言われて勉強するのではなく、自分たちの考えで、音読したり、聞き合ったりしている様子に、他の学校の先生方もとても驚いていましたよ。引き続き、今日からも学び合いを頑張っていきましょう。

さて、みなさんは今、息を吸ったり吐いたりしていますね。これを呼吸といいますが、体の中のなんて言うところでしているか、知っていますか？

そう、胸の肺ってところで、呼吸しています。実は、この肺に水が入ったりすると、ゴホンゴホンとむせた感じになってとても苦しいのですが、肺に水が突然たまって、場合によっては死んでしまう病気、肺水腫という病気があります。実は、校長先生のところの犬のチェリーが少し前に、この肺水腫という病気になりました。

ある日、チェリーがいつもは人間みたいに夜になると横になって寝るのですが、その日はまったく横にならず、ずっとお座りのままで、うとうとしているのです。「チェリー横になって寝てもいいんだよ」といって、無理に横にさせてもすぐに起き上がって、お座りの態勢になるのです。あとから知ったのですが、それが肺水腫という病気の特徴だそうです。

翌朝、チェリーを動物病院に連れていきました。これは少し重い病気かもしれません。と言われて、病院でくわしく検査することになりました。

夕方お迎えにいくと、チェリーは酸素ルームという小さなゲージに入って、校長先生の顔をみると、元気に飛びはねていました。ただ、お医者さんが「元気そうに見えますが、肺水腫という病気で、とても危ない状態です。でも、この病院では入院ができません。もっと大きな病院でみてもらったほうがいいでしょう」と言われたので、とりあえずチェリーを連れて家に帰ることにしました。

そして、治療費を払うためにチェリーを床にそっとおき、お金を払ったあと、再びチェリーを抱きかかえると、なんと息をしていないことがわかりました。すぐに、お医者さんに「チェリーが息をしていません！」と言うと、お医者さんがチェリーを手術室に運び込み、口から酸素のチューブを入れたり、点滴をしたり、心臓マッサージをしてくれました。

すぐに、校長先生は奥さんと、娘に連絡して病院に呼びました。２人ともとてもチェリーをかわいがっていましたので。

すると、なんとチェリーが息を吹き返したのです。あ～、よかった～と思っているところに、奥さんと娘も泣きながら手術室に入ってきました。よかったねと、みんなで抱き合ってよろこんでいました。

お医者さんも、もう少し酸素ルームで様子をみましょうと、酸素のチューブを口からはずしました。そして、かわりに酸素マスクをはめて、酸素ルームに運ぼうとしたのですが、そのときめずらしくチェリーが嫌がったのです。チェリーはとてもおとなしい犬で、めったに吠えないのに、そのときは激しく抵抗しながら、ついに

大きな声で「わんわん」と吠えたのです。
　さすがに校長先生もチェリーを抱きかかえながら、「チェリー、いい子に酸素マスクしないとだめだよ」と言って何とか酸素マスクをはめて、酸素ルームに運びました。
　そして、酸素ルームに入って、２回ほどぐるぐるとその場で回り、校長先生と目が合うといつものように、ニコっと笑って、その場にばたんと倒れました。なんと、また心臓が止まってしまったのです。
　すぐにお医者さんが、チェリーを酸素ルームから出して、再び手術室にもどして、点滴や心臓マッサージを始めました。酸素のチューブものどに差し込みなおして、酸素も肺に送りました。
　みんなずっとチェリー、チェリーと叫んで、こっちに戻っておいで、一緒にお家に帰ろう、帰って家で遊ぼう、お散歩にいこう、ジャーキーもあるよと一杯いっぱいさけんで、チェリーを生き返らせようとしました。
　お医者さんも、心臓を動かす強力なお薬をたくさんたくさん注射してくれたり、３０分以上もずっと心臓マッサージをしていたのですが、結局チェリーの心臓は二度と再び動くことはありませんでした。１４歳と５ヶ月のあまりに短い一生でした。

　冷たくなったチェリーを抱っこして、家に戻り、おふとんの上に寝かせて、みんなでチェリーを囲み、その晩は夜遅くまで泣いていました。校長先生も、一生でもうあんなに泣くことはないだろうというぐらい泣きました。
　次の日、どうしてもお伝えしておきたいことがありますとお医者さんから電話がありました。「この肺水腫という病気は、本当に突然死んでしまう恐ろしい病気で、いったんおあずかりして、そのまま死んでしまう子がほとんどらしいのです。でもチェリーちゃんは、校長先生が来るのを待って、いったん心臓がとまりながらも、また動かして奥さんや、娘さんにもちゃんと会うことができました。ほんとうに頑張り屋さん、ほんとうにいい子でした。」というお話をしてくれました。
　そのとき、あの最後の「わんわん」と叫んだのは、酸素マスクが嫌だったのじゃなくて、「お父さん、お母さん、お姉ちゃん、今までありがとう。楽しい人生だったよ」という最後のチェリーのお礼の言葉だったとそのとき気が付きました。だから最後、ニコッと笑って倒れたんだと思います。

　その日から、校長先生はずいぶん落ち込んでいます。でも、前を向いて生きていかないといけません。もちろん次の日もがんばって学校にきました。児童のみなさんに「おはようございます」とあいさつされると、少し元気になれて、なんだか心が軽くなりました。あいさつしてくれた児童のみなさん、ほんとうにありがとうございます。

　校長先生のように、ペットを失ってショックを受けている人が、立ち直る一つの方法として、文章に残す、書いてその時の気持ちを整理していくという方法があることを知り、その日のことを日記に書いたり、お手紙を書いたり、とにかくいろいろな形で、チェリーちゃんが天国の虹の橋に行ったお話を書きました。
　すぐには心は晴れなかったのですが、やはり書くということで、少しは心が落ち着いていきました。

　みなさんも、これから生きていく上でとてつもなく悲しいことやつらいことがあるかもしれません。でもそこから逃げることはできません。何とか自分の中で、乗り越えていかないといけない、そんなときに、「書く」「文章に残す」と

いう方法もあるということを、今日は覚えてください。

　これで、校長先生のお話しを終わります。さいごまで、静かに聞いていただきありがとうございました。
　また、よかったら校長室の前のボードに、今日のお話の感想をつぶやいてみてください。